

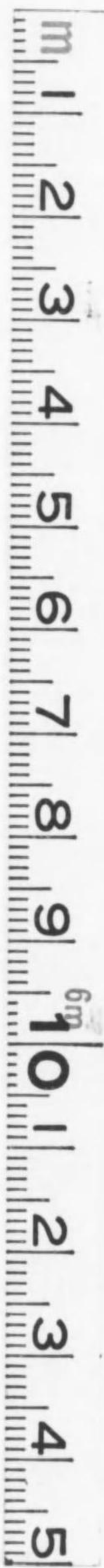
特259

14

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十九)



始



特259
14



臨濟宗
建長寺派
管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十九)



碧巖錄講演第一部(第五十則迄)自其十一總目次 卷末に掲載
至其十九

碧巖錄提講

第四十七則 雲門六不收

◎垂示

垂示云、天何言哉、四時行焉、地何言哉、萬物生焉、向四
時行處可以見體、於萬物生處可以見用、且道、向什麼處見
得衲僧、離却言語動用行住坐臥、併却咽喉唇吻、還辨得麼、

讀方

垂示に云く、天、何をか言ふや、四時行はる。地、何をか言ふ
や、萬物生ず。四時の行はるゝ處に向つて以て體を見る可し、

萬物の生ずる處に於て以て用を見る可し。且く道へ、什麼の處に向つて、衲僧の言語、動用、行住坐臥を離却し、咽喉唇物を併却することを見得せん。還辨得するや。』

天何言哉から萬物生焉までの十六字は、御承知の如く論語の陽貨第十七に出て居ります、それと同意義の文句であります。

——見得の二字は衲僧以下唇吻までにかけて讀むべし。然らざれば言旨貫徹せず。

仰いで見よ。日月を始め凡ての天體は無言にして間斷なく循環し全世界に光と熱とを與へて居る。然れども未だ曾て一言半句も與へたとも授けたとも云はぬ。そこが天の天たる天の本領。

——俯して見よ。地は天體の活用に順應し、千差萬別、千態萬狀、其のものそれをして一々其のものの本分を全うせしむ。

然れども是れ又未だ曾て我なしたり我なせりと云はず。古人の句に、桃紅李白薔薇紫、問着春風總不知、可謂不言實行家、と。——四時の體は平等、——萬物の用は差別。——差

別の用は平等の體に依り、平等の體は差別の用に依る。而して差別、差別と云はず。平等、平等と云はず。互に言はず共に語らずして一切の物を變化發育せしむる處に天の妙あり地の靈あり。心ある人、知らざるべからず。氣ある人、學ばざるべからず。天の不言實行を學び地の無言活用を習はば、所謂、天地と

我、と同根、萬物と我と同體なる所以を、イヤデモ覺得すること
が出来る。人は天地人三才の一、是非とも天地に愧ぢざる人と
ならざるべからず。——抑、衲僧とは如何なるものか。衲僧と
は假名、其の本體は心の祖となるにあり。心の祖とは一切の事
物を産出する其のもとと云ふことである。天も産出し地も産出
し、四時も循環せしむべし、萬物も發育せしむべし。天云はず
と云ふが天のみに非ず、地語らずと云ふが地のみに非ず。衲僧、
元より云はず語らず、而して一切事、一切處に於て能く放ち能く
把り、能く殺し能く活かし、能く大にし能く小にし、能く顯し
能く藏す。故に云ふ、我宗無言句、無一法與人、と。——聞

四

かずや、言語道斷、心行所滅、と云ふことを。多くの人は、言
語道斷と云へば無言語のこと、心行所滅と云へば不心行のこと
と速斷し去るが、錯、錯、大錯である。須く知るべし、無語中
に語あり、無行中に行あることを。信ぜざれば見よ、兎馬に角
あり牛羊に角なしと云ふことを。言語道斷とは一切の言語是な
り。心行所滅とは一切の心行是なり。恁麼は行住坐臥を超越し
咽喉唇吻を放下したる活境靈致である。茲に到達せねば名實相
應の衲僧とは云へぬ。サア其の名實相應したる眞箇衲僧が、天
地の無説無言、無作不動にして能く四時を循環し萬物を發育す
る其の状態、如何なる處に於て見るべきか。心眼を開きし人あ

五

らば、古人の言語、動用、咽喉唇吻を離却し去つて大法を擧揚こたげなされた、其の典型を見るべし。心眼の開不開は左の本則に依つて是を證明すべし。――

◎本則

擧、僧問雲門、如何是法身、門云、六不收、

讀方

擧す。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ法身。」門云く、「六不收。」

法身のことは前の三十九則に葛藤かつとうして置きました。一口に云へば佛の實體であります。悟りたる人から云へば佛の實體であ

るが、實は宇宙の本體、世界の實質で不生不滅不垢不淨不増不減であります。而して大は方處を絶し、細は無間むかんに入る、と云ふ玄の玄、妙の妙なるもの。妙と云うても不可思議のことでもなし、玄と云うても不可解のことでもなし。其の自由自在、其の變化出沒を假に玄々、妙々と云うたまで。具眼の人、卓見の人、其の人の立場より觀見し來れば蓋し尋常底の茶飯ちはんである事が知れる。

六不收、此の六不收の三字につき井上君が自己の六不收を吐露なされたが、千金の價がありますから一寸拜借して諸君と共に賞翫致しませう。

「此の三字には何か一定の意義が含蓄せられて居る筈である。(如何にもあります。) 元來、雲門と云ふ男は、達磨の沈黙を守つて居ればよいものを、獨り合點のよがり和尚と見えて頗る不得要領なことを云つて居る。勿論、彼自身の心中には要領を得て居たであらうが、朝晩傍について居る細君でない限り彼の言語はどうも不可解である。こんな例外な和尚を笠に着て、法螺でエラバツテ居る禪僧の氣が知れぬ。」と六不收の御說法。——井上君の云はるゝ如く、昭和の禪僧は、(例外もあります) 雲門禪師の六不收、其の實體を知らずしてエラバツテ提唱もし、參禪も聞き、我こそはと獨坐大雄峰を氣取つて居る漢、極めて多

し。衲もたしかに其の一人。故に井上君の六不收は相似禪を以て衣食の資料として居る者のためには釋迦の一代時教よりキ、メがあります。心ある禪僧は書して以て座右の銘となし、常に拜讀して自己を誠訓すべし。——或人は云く、「六不收とは、宇宙萬象の本體たる法身が空間的にも時間的にも無限であると云ふことを示すため、六合内に收めることが出来ぬと斯く云ひしもの。」と。又或人は云く、「眼耳鼻舌身意の六根に收め得べきものでなし。」と。——恁麼の愚なる俗説は澤山あるが、何れも紅心に中つて居りません。要は圓悟禪師の下言に、八角磨盤空裏走、とあるが、是は當らずと雖も遠からずである。然らば

畢竟如何。曰く、六不收。――

或僧が雲門禪師に向つて、「如何なるか是れ法身。」と問うた。法身のこととは前に簡単に云うて置きましたから再説は無用であるが、問僧の意旨を忖度して重ねて申します。法身のことにつき左の如き話がある。

昔大原の孚上座と云ふ人が涅槃經の講義をなされた。其の講義は一糸亂れず實にお手に入つたものだ。此の時、下座に聞いて居つた禪僧が覺えずクス／＼と失笑致しました。すると、それを一見したる講義僧、講座より下り來つて失笑した僧を呼んで、「貴殿は何故に拙僧の講義を笑うた。」となじりました。此の

時禪僧曰く、「折角の御講義であるが、痒い處に一向手が届いて居りません。それ故に思はず失笑致しました。――若し私の失笑した、それが悪いと思ひなされるならば今一度講義して御覽なさい。」と苦言を呈しました。然らばと云ふ勢ひで孚上座、重説して、「抑、法身の道理は大虚の如く縦に三際を極め、横は盡十方に互り、八極に彌綸し、二儀を包含し、縁に従ひ感に赴いて普からずと云ふことなし云々。」と懸河の雄辯を揮ひました。その時、禪僧云く、「貴殿は法身邊のことは能く知つて居らるゝが、未だ眞箇の法身をお知りなさらぬ。」――此の問僧、或は此の孚上座の如く法身の説明家ならん。然らざれば、

法身の法身たる眞箇の法身を手に入れんが爲に殊更に來つて雲門禪師に問うたものならん。果して然らば雲門禪師の六不收を一聞して大悟徹底すべきである。六不收の下に省ありとも大悟とも無きを見れば、所謂空手にして來り空手にして去りたるものならん。—— 苟も法身を手に入れようと思へば大死一番せざるべからず。—— 或禪僧の處へ、人あり來りて云く、「私を悟らしてください。何なりとも貴僧の云ふ通り致します。」そこで禪僧は、「然らば、その池の端にある松の木に上りなさい。」「ハイ。」と云うて登つた。「もつと登れ。もつと登れ。もつと上に登れ。」さうして左右の手は松の樹の枝を持たせ、兩足に松の

枝を踏ませ、それから「右の足を離せ。次に左の足を離せ。次に右の手を離せ。次に左の手を離せ。」と云ふと、「それでは落ちます。」と云ふ。「お前は私の云ふ通りにすると云うたではないか。」と云はれた。—— 法身を手に入れようと思へば身の執著を一切放下しなければ把握することは出来ません。—— 問僧の如く、聞いて手に入れようの、教へてもらはうの、と云ふ骨惜しみでは決して大悟は出来ません。されど雲門禪師は無語中の有語を吐き、法身の全體を六不收と垂示なされたは實に大慈悲、親切無量である。—— 垂示の句に、天、何をか云ふや、四時行はる、と云ふそれである。是に對し問僧が、地、何をか

云ふや、萬物生ず、とあるべきである。然るに天、天たりと雖も、地、地たること能はざるは殘念々々。——之是の六不收、一個の金剛王寶劍、生死を斬り涅槃を斬り、煩惱を斬り菩提を斬り、今時を斬り那邊を斬り、諸佛を斬り歷祖を斬り、併せて自己を斬り、斬り、斬り盡したる處に眞箇の法身が活現する、出生する。——信ぜざれば大死一番せよ。大死一番すれば直に大活現前する。——六不收は六合のことだの、六根のことだの、と文字につき左顧右眄して居る様では千年たつても萬年たつても法身は見えぬぞ。況んやお手のものにするに於てをや。白雲萬里。——

◎頌

一二三四五六、碧眼胡僧數不足、少林謾道付神光、卷衣又說歸天竺、天竺茫茫無處討、夜來却對乳峰宿。』

讀方

一二三四五六、碧眼の胡僧も數へ足ず。少林謾に道ふ神光に付すと。衣を卷いて又説く天竺に歸ると。天竺茫茫々として討ぬるに處無し。夜來却つて乳峰に對して宿せり。』

一、二、三、四、五、六は讀んで字の如く別に仔細も道理もなし、一二三四五六。此の一二三四五六につき天衣禪師の投機の偈を思ひ出しましたから添へて措きます。一二三四五六七、萬仞峰前獨

足立、奪得驪龍領下珠、一言勘破維摩詰。』——碧眼は達磨大師のこと。——數不足は、かぞへ得ず、數へ盡せぬと云ふ心。

——謾道は嘘を云ふことではない。偶然、無意義、と云ふ意味に見るべし。——神光は達磨大師の弟子慧可大師のこと。

——付すは大法を付與すること。——卷衣は衣服をたむむこと。達磨大師より付與された法衣を持して、と云ふ意なり。

——天竺は印度のこと。——乳峰は雪寶山のこと。或は雪寶山にありとも云ふ。或は云ふ、嵩山の一部にある五乳峰のこと、と。眞偽は暫く措き、要は敢へて天竺に限らず、現今茲にもあり。諸君に見えますか。見んと欲せば見る能はず。——井

上君は「雲門禪師の當時、仁王護國般若波羅密多經が珍重された。故に雲門禪師、經文の所説を取り六大不收と云ふべきを一層簡短に六不收と云はれたのではないか。」と云うて居らるゝ。此の意に依れば法身は六大に收めきれぬと云ふことになる。六大に收めきれぬが故に、流石の達磨大師でも數へ盡すことは出来ぬ、さすれば數では法身を包含し得ず、と云ふことになる。

雪寶禪師は恁麼の意味にて一二三四五六、碧眼胡僧數不足、と吟じられたものか、——眞偽は雪寶禪師に親しく詰問しなければ要領は得られぬ。——されど衲が管見を以て是を計れば、雪寶禪師は一二三四五六を以て雲門禪師の六不收そのもの

を自己のものにしたのである。六不收即一二三四五六、一二三四五六即六不收。——故に七歳にして玉を辨じたと云ふ達磨大師の如き超越の大智御所持のお方でも是ばかりは數へることは出来ぬ、と共に法身そのものを達磨大師に合併されたのである。以下は達磨大師につき法身の様子、法身の落草談。——法衣を達磨大師が神光に、汝は我が髓を得たりと云うて付與せられたと云ふが、それは謾語だ、虚言だ。由來一法の與ふるものなし。——與ふることも受くることも出来ぬ。それそれそれがそのまま、六不收。それそれそれがそのまま、一二三四五六だ。——それそれそれが法身。——衣を卷いて、天竺に歸ると云

ふことは、傳説に達磨大師が一旦神光に付與した法衣をとりあげて再び天竺に歸つたとあるを云ふ。其の證據は宋雲が葱嶺にて達磨大師に逢うたと云ふ申立に依つたのである。果して然りや否やは歴史専門の大家に一任す。雪竇禪師の頌面では天竺に歸られたことになつて居る。歸られたら天竺に達磨大師は居らるゝ筈だが、天竺を尋ねてもどこにも居らぬ。居るか居らぬかは第二として、茫々たる遠方の天竺まで追手をやる事は容易でない。——聞く、達磨東土に來らず、二祖西天に往かず、と云ふことがある。達磨大師は東土に來らず、來らざる者が再び天竺に歸る筈はない。——來たの歸つたのと云ふお方は眞箇

の達磨大師を知らぬのである。——眞箇の達磨大師を御存知なければ、無論六不收も一二三四五六も知れるはずなし、況んや法身に於てをや、と云ふ結論になります。』以上の次第で何れの處を尋ねても達磨大師は居らぬ。されどヒヨツトしたら近き處に居りはせぬかと尋ねて見たら、居つたく、夜來却つて乳峰に對して宿す、で、居たく、茲に居た、と雪竇禪師は法身の達磨大師に相見なされた。豈何ぞ雪竇禪師に限らんや。お互が朝々達磨大師と共に起き夜々達磨大師と共に寢て居る。それを知らずに、是は煩惱だ、——是は生死だ、——是は菩提だ、——是は涅槃だとして居るのである。考へて見れば實

にばかくしきこと此の上なしである。大死一番せざる以上は如何ともなしがたし。参考の爲に一句蛇足を添へておきます。佛の眞法身まっしんは猶虚空の如し。物に應じて形を現ずるは水中の月に似たり。——佛身は法界に充滿し、普く一切群生の前に現ず。縁に隨ひ感に赴きて同じからざるなし。而して常に此の菩提座に坐す。』

法身と云うて別物があるに非ず。人々具、箇々圓。飯を喫するに他人の口をからず自己の口で喫す。茶を飲するに他人の咽をからず自己の咽で飲す。それそれが法身、それそれが達磨。それそれが一二三四五六。——恁麼いんまに婆言ばごんを弄なせし衲なまは、是

れ法身か是れ佛身か、是れ達磨大師か、是れ一二三四五六か。

——真箇の法身は法身だの達磨だの六不收だの一二三四五六だのと云ふ名稱を下すべきものに非ず。——されど時に依り處に依り法身とも達磨とも六不收とも或は一二三四五六とも、又は猫とも杓子とも云ふ、敢へてさまたげずである。——

(昭和十三年七月二十三日講演)

第四十八則

王太傅煎茶

◎本則

舉、王太傅、入招慶煎茶、時朗上座與明招把銚、朗翻却茶銚、太傅見問上座、茶爐下是什麼、朗云、捧爐神、太傅云、既是捧爐神、爲什麼翻却茶銚、朗云、仕官千日失在一朝、太傅拂袖便出、明招云、朗上座喫却招慶飯了、却去江外打野榿、朗云、和尚作麼生、招云、非人得其便、雪竇云、當時但踏倒茶爐、

讀方

舉す。王太傅、招慶に入つて煎茶す。時に朗上座、明招の與

に銚ちやうを把とる。朗ちやう、茶銚ちやうを翻却す。太傅たいふ見て上座じやうざに問ふ、「茶爐ちやうろ下した是れ什麼なんぞ。」朗云く、「捧爐ほうろ神じん。」太傅云く、「既に是捧爐ほうろ神じん、什麼なんとしてか茶銚ちやうを翻却す。」朗云く、「仕宦しつわん千日、失一朝いつちやうに在り。」太傅拂袖ほうしゆして便すまはち去れり。明招云く、「朗上座、招慶の飯を喫却くつし了つて、却て江外かうがいに去つて野檉やせいを打たす。」朗云く、「和尚わうしやう作麼生さつまん。」招云く、「非人ひじん其の便べんを得たり。」雪竇せつざう云く、「當時但茶爐たがを踏倒たふすべかりき。」

煎茶せんちやには種々の作法ありと聞くが、衲なまの如きは眞箇まごの野僧やそう、煎茶の禮儀は總て不知不能。——聞く、銚ちやうは日本の婚禮式こんらいしきに使用する銚子ちやうしそのものに似たり、と。是れ又然りや否や存じ申さず。——

翻却ほんかく、ひつくりかへしたことに相違さかない。——

故意こぎであると云ふ人もあるが、蓋し偶然の過失かじならん。——

捧爐ほうろ神じんは爐の臺たいに爐を捧持ほうぢして居る裝飾しやうじの鬼おにか又は象ぞうの類るいならん。其の意、一は以て美的に、一は以て安定に。——仕宦しつわん千日せんじつ云々は、九佞くべいの功こう、一簣いつさいに虧かく、百日ひゃくじつの説法せっぽう〇一ツ、と云ふ意である。暗くらに太傅たいふが一朝いつちやうの過失かじで配處はいとの月つきを見る、それをほのめかしたものなり、と。或は然らん。——喫却くつ、却去くつそは、招慶しやうけい寺じの世話せわになつて居りながら、却つて寺じの不爲ふたがをなす、と云ふこと。野檉やせい、枯木こぼくの根ねのこと。必要なことをせずせに不必要ふたがのことをする、と見るべし。——非人ひじんは、鬼神くわんじん又は惡魔あくま、是は外

來の非人。煩惱、妄想、是は内在の非人。——非人と云うて乞食や浮浪人を云ふのでなし。——便は、便宜、都合、活路、時機、これらに當ります。

此の一則は茶事に因んで禪そのものを商量したものである。口に茶禪一味と云ふが、眞箇茶禪一味の眞境に入る人、古往今來、果して是れ幾人ぞ。極めて寥々である。——四明大川禪師、惠山に煎茶と云ふ一詩がある。斯道の人の爲に添へておきませう。

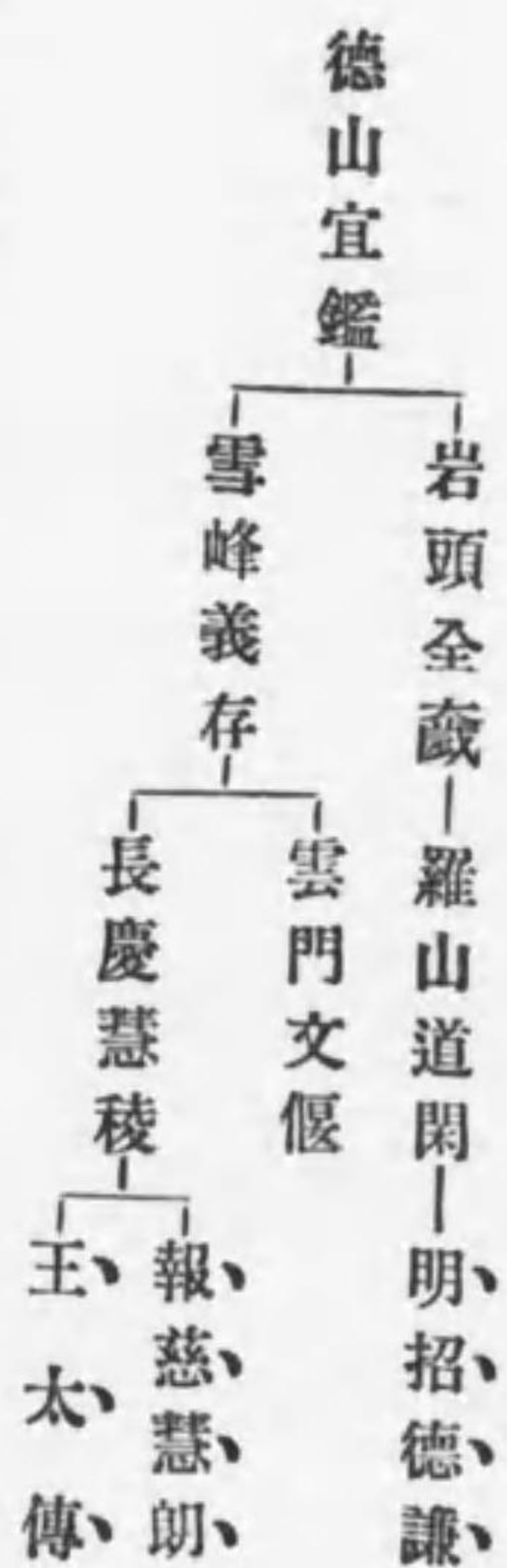
瓦餅破曉汲清冷、石鼎移來壞砌烹、
萬壑松風供一啜、自籠雙袖水邊行。

苟も茶を飲むならば萬壑の松風を一啜に供すべし。——苟も禪を修するならば乾坤を一口に吞却すべし。——若し茶を喫し禪を修し、而して恁麼なることを得ざる人は、茶の妙味、禪の佳境、共に知らざる者と云ふべし。焉ぞ茶禪一味たることを得ん。——餘談は中止、本則を提講致しませう。

王太傅、王は姓、太傅は宦名、延彬は其の名、當時は泉州の知事。『長慶慧稜禪師につき禪を修行なされた居士である。

朗上座、今は泉州招慶寺の小僧、後に慧稜禪師の法を嗣いで福州報慈院に法幢を建てられた慧朗禪師。——明招、是は朗上座の先輩、婺州の明招山に四十年間、聖胎長養なされた。故

に通名明招、本名は德謙、今は招慶寺に於て慧稜禪師の補助役をつとめて居らるゝ。茲に三人の法系を示せば左の如し。



何れの公案もそれ〴〵背景がある。特に此の公案は背景が必
要故に一通りお耳に入れておきます。

王延彬と云ふ人物は、唐の滅亡に基因する中央政府の瓦解と
共に、泉州の刺史に左遷せられ、引續き泉州に居て閩主の配下

に屬して居られたのである。泉州招慶寺は王延彬が特に慧稜和
尙のために創立したものである。故に大檀那を氣取り我こそはと尊大
にかまへて居る王太傅を客席に、愈々茶事、方に始まらんとする
に當り、朗上座が接待役の明招の處へ大急須、例の茶銚を爐から
とり渡さんとする其の途端に、失敗々々大失敗。茶の一杯はい
つて居る大急須を茶爐の上に顛倒したからたまらない。——
座敷一面、灰かぐら。眼も口もあけられたものでない。——
胸に一物なき人でも多少の無禮呼ばはりをする處。それが胸に
一物どころか、我こそは此の寺の大檀那なりと常に氣取つて居
る王太傅、無禮を叱責せざるべからず。——「小坊主、氣をつ

ける。失禮千萬にもほどがあるぞ。此の疎骨者めが。——手元に氣をつけろ。一體その茶爐の下には何がある。よく見ろ。」

——朗上座、聊か平身低頭、されど胸中に思ふ處あり。「ハイ御承知の如く此の爐の下には捧爐神が爐を捧げてをります。」

——「ナニ、チャント捧爐神が捧げて居る。それなら茶銚をひつくりかへす道理はなきはず。然るに此の様な失敗を起したのには要するに貴殿が誠意を用ひざる、それが爲である。」——時々來訪するが爲に朗上座が冷遇をする、それが常に氣にかゝつてをる、それを茲で暗に漏らしたのである。朗上座もかねぐ胸にある思を、こゝぞとばかり所謂一休式に、「ハイ仕宦千日、

失一朝に在り、と云ふことがあります。」と一本お見舞して、私は神でなし佛でなし、普通の人間であります、故に茶銚をひつくりかへす位のことはありません、と云うて平氣でをる處は、サガ朗上座だ。是でこそ禪坊主の價值がある。——

井上君云く、「日本でも足利時代に、色々の武將、官人が色々の處に禪寺を建立したものである。彼等が寺院を建立した動機はあまり宗教的であつたらしくも思へない。彼等は禪寺は女の居ない妾宅である位の考で物好きに禪寺を建立したものである。唐宋時代に於て支那の官人が禪寺を建立した動機や目的も禪寺は女の居ない妾宅なり位のところであつたことは色々の史

實によつて立證することが出来る。而して今この王太傅も、昔の日本の大宦、武將が左遷された時によくやつたやうに、招慶寺にやつて来て、大檀那顔をして大威張りに威張り、雲水坊主を髪のない給仕女扱にしたものと見て差支ない。朗上座もたしかにその髪のない給仕女の一人であつたに相違ない。而して今この朗上座は招慶寺の大檀那公、左遷大臣王延彬の前で、丁度紫野大徳寺で將軍義滿をやりこめた一休の役を勤めたのである。」と。衲の云うたことと重複して居る處もあるが参考には上々の資料故に附記した次第である。

以上を總括して通俗的に話して見ませう。

泉州に左遷された前の太傅、招慶寺の大檀那刺史王延彬ワキタニヒルが或日突然招慶寺へやつて来た。生憎此の日は住職慧稜ケイレイ禪師は不在。それにもかゝはらず、我が家にも歸りし如く、これ小僧、茶を一杯、と云ふ勢ひで方丈の間に通り、泰然と坐りこんだ。

——亦やつて来たか、ヤカマシヤが、——と心に思うても、寺に對して大切の人であるから、捨て置く事は出来ぬ。留守を守つて居る明招和尚が相伴兼接待役となり、いよくお茶と云ふことになつた。朗上座が明招の處へ大急須を持ち來らうとした其の途端、如何なるはずみか、お茶を一杯いれてある大急須を爐からとり損なつたから、そこらこゝら一面の灰だらけ。——

眼も口もあけることの出来ぬ大さわぎが出現した。——亂暴と見れば見れぬこともないが、失敗は何人にもあること。況んや小僧に於てをや。——然るに胸に一物ある王太傅のことであるから、是は何か深き考があつて殊更にやりしことと心に思ふたものと見えて、満面に怒氣を含み、「コラ小僧、茶爐は自身で大急須を顛倒させはしないぞ。能く眼を開いてその茶爐の下を見よ。一體何者がをるか。此の明き盲。」と牛の糞でも叩く様に叱りつけた。——普通の小僧であつたら泣き出すか平身低頭して謝罪する處である。さすが慧稜禪師の處に居る小僧だけあつて貧乏ゆるぎもせず、平然として答へて云く、「ハイ

此の茶爐の下には御覽の如く捧爐神が爐を捧げて居ります。」——「ウム、——チャント捧爐神が爐を捧げて居るなら決して茶銚をひつくりかへす譯はないはずだ。然るに斯くなりしは其の方が心に何事かを思ひ、人に對して敬意を用ひぬからだ。」——綿裡に針あり、と云ふべし。——すると朗上座、一休和尚そちのけ氣取りで云く、「仕宦千日、失在一朝」と云ふこともありません。私は僧服を着してこそ居れ、神でなし佛でなし、時と場合によつて茶銚をひつくりかへすこともあります。」言中、響あり。——私の茶銚を落したのは、尊公が太傅の高位から田舎の知事に急轉直下なされた、それに比べますれば何で

もないことでもあります、と憎まれ口を叩いたからたまらない。火の燃える處へ薪木を添へた様なもの。薪木が燃えて居る其の上に油をそ、い、い、だも、同、様。——これを耳にした王太傅、事實小僧の云ふ通りであるから、怒るも怒るもカン／＼に怒つた。

——いきなり拂袖し一言の挨拶もしないで、疊をけつて出て行つてしまつた。——接待役の明招和尚、朗上座の活動には心中共鳴して居るもの、王太傅に對して一應は驚かざるを得ず。只驚いたばかりではすまぬ。——そこで朗上座に向ひ、「朗上座、君は招慶寺の世話になつて居りながら、寺のためになることを考へずに、自分で思つたことを此の寺の大檀那た

る王太傅に向つて無遠慮に振舞ふと云ふことは甚だよろしくない。君は此の寺の穀潰しと云ふものだ。」と叱り飛ばした。

——朗上座は自己の所爲に於て聊かも暗きことがないから、「それなら、かゝる時、あなたが處をかへて私であつたら如何がなさる。」と返問に及んだ。此の朗上座、相當に氣概と信念を備へたヤツだ。往く末は無論一方の宗師家となるであらう。

——「ウム私なら君の云ふ様に極端なことは云はぬ。私が見をして不注意であつた處から、爐を捧げて居る捧爐神が其のすきにいたづらを働いたのであります、と當らずさはらず平穩に挨拶するサ。」——と云うた。明招和尚の立場としては元

より然るべきである。さうなくてはならぬ。仁義道中、——禪、坊主だからと云うて、場合も處も委細かまはず、禪機を振りまはむたら、それこそ野狐禪。——今時は處も場合も見さかひなく無茶苦茶に禪機々々と云うて棒喝を勝手氣儘に振りまはす禪病者が澤山あると云ふことだ。お互に注意すべきことである。

——雪竇禪師は本則に向つて自己無關係の立場から著語して、「拙僧が若しその座に居合せたなら、茶銚は無論のこと茶爐までひつくりかへして、室中どこもかしこも熱湯だらけ灰だらけにしてやつたものを。残念、々々。」と喧嘩がすんで棒を振りまはして御座るが、ウカ／＼雪竇禪師の佛口蛇心に乗つてはな

らぬ。——雪竇禪師、或は南に面して北斗を見て斯く云はれたかも知れぬ。——されど雪竇禪師としては斯くなければならぬ。何の故に。雪竇禪師は、上諸佛なく下衆生なし、所謂盡乾坤唯一人と云ふ孤峰頂上底から云うて居らるゝ。雪竇禪師の境界を知らずして叨りに鳥のまねをなすべからず。——

圓悟禪師は、雪竇禪師の當時但踏倒茶爐、と云ふ處へ下語して、「然も是の如くなりと雖も徳山門下の客と稱せられず。何のことだ、茶爐を踏倒した位のことでは不十分だ。仁に當つて師に譲らず。此の場合茶爐を踏倒するその足を手に換へ、鐵拳を堅めて太傅の横面をイヤと云ふほどお見舞申したら、朗上座も

明招も王太傅も一齊に目がかさめたであらうに。」と賊後に弓を張つて御座るが、喧嘩は既に終了、おそかりし。——人あり、衲に向つて、「恁麼時如何。」と問ふあらば、衲は「他に向つて遂事は説かず。」と云ふ一句あるのみ。

◎頌

來問若成風、應機非善功、堪悲獨眼龍、曾未呈牙爪、牙爪開、生雲雷、逆水之波經幾回。」

讀方

來問は風を成すが若きも、機に應ずることは善功に非ず。悲しむに堪へたり獨眼龍。曾て未だ牙爪を呈せず。牙爪開き、

雲雷生ず。逆水の波、幾回をか經たる。」

字解、分解。

來問は王太傅の威氣揚々として招慶寺に來參したる様子。

成風は堂々たる威儀。——應機は王太傅の叱責。——

獨眼龍は明招のこと。渾名を獨眼龍と云ふ。左眼を失して居るが故に、と云ふ説もある。牙爪開、生雲雷、是は、朗上座が仕宦千日、失在「一朝」と云うた、それを賞讃したのである。——逆水は雪竇禪師が王太傅の腹中を忖度して云うたもの。——

提講。

王太傅が、「茶爐下是れ什麼ぞ。」と問ひかけた、其の勢ひは、名

大工が手斧を揮うて鼻端の白土をとり除いた妙手よりも一層鮮かである、と托上した。それに相槌を打つて圓悟禪師が、「箭、虚發せず。」とおだて、更に「偶爾に文をなす。」とオチャラカシた。

昔から、おだてモツコに乗ると落さるゝぞ、と云ふ里語がある。王太傅油断なさるな。——王太傅の威風に逢うて朗上座の返答、極めて不出來。故に「善功に非ず。」と抑下された。それに圓悟禪師が共鳴して、「泥團を弄する漢、什麼の限りかあらん。」とお鬚を撫でた。朗上座こそお氣の毒。明招和尚に叱られ、雪竇、圓悟兩禪師から跳飛ばされ、浮ぶ瀬がないとは此事である。——されど茲に曇華がをるぞ。瘦蛙まけるなく。獨

眼龍の明招和尚、此の人、朗上座の失敗を見て口を出したから、定めし龍の本領を發揮し爪牙を顯すかと思ひの外、王太傅の手前、遠慮してか尋常一樣底で終了を告げたは、如何にも残念々々。故に圓悟禪師曰く、「また牙爪の呈すべきなし。」此の龍には、爪がない、牙がない、蚯蚓だ。——牙爪開、雪竇禪師が明招に代つて牙を出したぞ。爪を振うたぞ。それはどこに。茶爐を踏倒す、それく、それが爪牙開、生雲雷。——龍が爪牙をふり立てたから雲が起り雷が鳴るは當然。——茲へ圓悟禪師が一句を下した。早天霹靂、ひでり年の雷は響が大きい。天下の衲僧無著身處。これはく不時の大雷雨。法華飛びこむ阿

彌陀堂。どこかそこらで雨宿りする處はないく、どこにもない。——盡天地雷雨ならざる處なし。ゴロくザアく。

鯉が龍となり斯の如く震天動地をなすまでの修行、それはく屈、述するに堪へたり。——洪波洪渺白浪滔天の中に飛び込み、血の涙、玉の汗、困苦艱難、その結果、始めて茶爐を踏倒することが出来る、と雪竇禪師の自畫自賛。——されど暗に、王太傅に茶爐を踏倒する力があつたら、否、王太傅に限らず朗上座、明招和尚、否、天下の修行する雲水僧、と云ふ餘音があるぞ。是は衲の逆水である。——下座。——

(昭和十三年九月十日講演)

第四十九則

三聖透網金鱗

◎垂示

垂示云、七穿八穴、搥鼓奪旗、百匝千重、瞻前顧後、踞虎頭收虎尾、未是作家、牛頭没馬頭回、亦未爲奇特、且道、過量底人來時如何、試舉看、

讀方

垂示に云く、七穿八穴、鼓を搥き旗を奪ひ、百匝千重、前を瞻、後を顧み、虎頭に踞して虎尾を收むるも、未だ是れ作家ならず。牛頭没し馬頭回る、亦未だ奇特と爲らず。且く道へ、

過量底の人來る時如何。試みに擧す看よ。』
字解並に分解。

七穿八穴は、攻める方の勇進、其の自在底の七通八達を云ふ。

—— 擣鼓奪旗は、敵方の武器を輕易に取り得る底、勇將の軍中に於ける自在の活動を云ふ。—— 百匝千重、瞻前顧後は、蟻の這出る寸隙もなき様に嚴重に守り且つ其の上に前後左右に氣を配つて聊かも油斷せざる様子。—— 踞虎頭云々、是は容易に出來ぬ、されど是非ともなさざるべからず。惡戰苦鬪の意味もあり樂戰安鬪の場合もある。攻める方は樂戰安鬪、—— 攻めらるゝ方は惡戰苦鬪。—— 牛頭云々は既に五則の處に於て

解説し了れり。されど秋野師が是につき老婆なされた言葉を申し添へて見ませう。秋野師曰く、「世界は皆是れ牛頭、没し馬頭、回るあり様。朝が晝になり今日が明日となる。春が過ぎれば夏が來る、夏が去れば秋になり、秋が去れば冬。—— 仕事の上にして同じ。一つ仕事を終へたかと思ふと又次の仕事が來る。要するに間隙のなきことを云うたものである。」と。如何にもお説の通り、世界の總ては前後の歩の如く、前が必ずしも前にあらず、後が必ずしも後にあらず、前後ありと雖も前後に非ず、時に依り處に依り、前が後となり、後が前となる。—— 更に言葉を進めて云へば、眞空妙有、妙有眞空、—— 又は煩惱菩

提、菩提煩惱。——過量底人は、此の垂示を借りて云へば踞虎頭收虎尾底の人、云ひ換へれば拔群、——非凡、——越格、

——所謂不世出の大偉人のことである。』
提講。

此の垂示は例を戦争にとり、主客應對、機鋒相讓らざる様子。

——敵を攻める時は敵の戦線を目がけ邁往勇進、七穿八穴、以て敵の太鼓を打ちやぶり、敵の旗を奪ひとる。可謂、樂戰安闘と。——若し一、敵にかこまれ百匝千重の場合は、前後左右に氣を配り、注意に注意を拂ひ、要心に要心を用ひ、聊かも油斷は出来ぬ。可謂、惡戰苦闘と。——守るにしても攻める

にしても踞虎頭收虎尾底の勇猛なる將軍は容易に得られるものではない。然れども我が禪門より云へば、容易に得られぬと云ふ其の將軍もまだく、向上の大家とは云へぬ。更に進んで牛頭没し馬頭回ると云ふ人でも第一義諦から見れば、不作家、頗る平々凡々、相手にするには何となく子供の様な思がする。故に望む處は、願ふ處は、過量底の大家、それである。』その大家たる過量底の銅頭鐵額が出て來る時は如何に應對すべきや。其の應對ぶりが本則だ。試みに舉揚するから、向上の禪に志す人は虚心以て聞くべし、空懷以て見るべし。』

序に従容錄にある垂示を添へて一覽に供します。曰く、「逢強

即弱、遇柔即剛、兩硬相擊必有二傷、且道、如何回互去。」と。
五〇
是は別に説明を下しません。讀んで字の如く一見分明でありま
す。

◎本則

舉、三聖問雪峰、透網金鱗、未審、以何爲食、峰云、待汝
出網來向汝道、聖云、一千五百人善知識、話頭也不識、峰
云、老僧住持事繁。」

讀方

舉す。三聖、雪峰に問ふ、「網を透る金鱗は未審、何を以て食
と爲す。」峰云く、「汝が網を出で來るを待つて汝に向つて道

はん。」聖云く、「一千五百人の善知識にして話頭だも也識ら
ず。」峰云く、「老僧は住持事繁し。」
字解及び分解。

三聖は鎮州三聖院の慧然禪師、——法系は臨濟禪師の弟子。

○黄檗希運—臨濟義玄—
—三聖、慧然、
—興化存獎
—桐峰庵主

此の三聖慧然が仰山慧寂の處に行きし時、仰山が「お前の名
は何か。」と尋ねた。其の時、三聖は平氣で、「ハイ名は慧寂。」
すると仰山が、「慧寂は我が名、お前の名は。」「私の名は慧然で

ござる。」と云うた。仰山茲に於て呵々大笑したと云ふ逸話がある。師匠の臨濟禪師が死に臨み、「拙者が死んだのち我が正法眼蔵を如何にするや。」と弟子共の行末を案じて問はれた。其の時、三聖は大喝一聲して臨濟禪師を安心させた、と云ふ話もある。

雪峰は義存禪師のこと。徳山門下の一偉僧である。前に屢々出て居るから今は略す。透網、是は網の目を通過する意ではない。網を飛びこすことである。大魚であるから網にかゝらぬ。金鱗、敢へて金鱗に限らず、巨魚の稱語と知るべし。透網金鱗とは大悟徹底したる人を云ふ。未審、是は考一

考すること。俗にハテナアと云ふ意なり。話頭、也不識、話し相手にならぬ。人の云ふことがわからぬ。住持、是は經營維持の意で、單に寺の和尚と云ふことでない。されど生活に追はれて居ると見るべからず。布教傳道、下化衆生と云ふことと思ふべし。眞箇の處を云へば住持事繁、檀用多忙も即布教、傳道である。下化衆生である。

提講。

三聖禪師が或日雪峰禪師を訪問、雪峰禪師のために小僧扱ひにされた禪話。

三聖禪師が雪峰禪師に對して問ふ、「網を透る金鱗、未審何を

以て食となす。」と。是は呈解問（自己の大悟底を呈出して他の調査を仰ぐ）、又は借事問（他の事を借りて自己の事を商量する）。——三聖禪師の意を忖度するに、「拙僧の如きは歸家穩坐底の金鱗である故、修行だの證悟だのと云ふ網の中にはをらぬ。既に坐禪だの觀法だのと云ふ食は喫し盡した。禪師の處に美食飽人の喫に當らずでなく、飽人の喫に當る美食中の美食があつたら頂戴仕りたい。」と高く出た。——「禪師の處に拙僧が所望する美食中の美食がありますか。」と雪峰禪師を一口に吞却し去らんと出陣した處は如何にも網を透る金鱗である。茲の處へ圓悟禪師が語を下して曰く、「爾只自知すべし。何ぞ必ずしも更に

問はん。」と。如何にも然りである。自己を知るものは自己なり。自己のことを他に問ふは未だ自己に充分達せざるがためである。『敢へて雪峰禪師のお口を勞するまでもなく、曇華の拙者でも、「汝が網を出で來らんを待つて汝に向つて道はん。」と云うてやる。否、「青小僧め、出すきたことを云ふな。四の五の云はずに庭の草でも取れ。」と云ひたい處だ。されど雪峰禪師は老古錐だ。棒も下さず喝も吐かず、「眞箇に網を出て來たらその時お前に喫すべき食物を教へてやる。」と。此の食物こそ三界になき古今無類の美味佳香であらう。坐下の諸君、其の香味が夢の如くにでも知れますか。——幻影の如くにでも見えますか。

——それが知れぬとあつては、此の本則を拜聴する資格はない。——三聖禪師は、自分の意旨を雪峰禪師が了解し得ざるものと速断して、「禪師は一千五百人の門弟を教化なさる大家でありながら、人の話が了解出来ぬとは今更驚く外はない。」と。——果して文字通り三聖禪師が雪峰禪師を抑下したか、そこは三者の知る處に非ず。圓悟禪師は著語して「迅雷霹靂、群を驚かす。」と。圓悟禪師は驚いたかも知れぬ。されど雪峰禪師は更に微動だもせず、泰然として曰く、「老僧は住持事繁し。」と。之是の一語、最も重し。過量底の人すら如何ともなす能はず、況んや不過量底の人に於てをや。——雪峰禪師の雪峰禪

師たる價值はこゝにある。知るべし、曾て三到九至の修行をなされた其の人であることを。——圓悟禪師云く、「此の語最も毒。」と。毒にもなり藥にもなる。要は是を使用する其の人の力如何にあり。——

◎頌

透網金鱗、休云滯水、搖乾蕩坤、振鬣擺尾、千尺鯨噴洪浪
飛、一聲雷震清颺起、清颺起、天上人間知幾々、

讀方

網を透る金鱗、云ふことを休めよ水に滯ほると。乾を搖がし
坤を蕩かし、鬣を振り尾を擺く。千尺鯨噴して洪浪飛び、一

聲雷震して清颺起る。清颺起る、天上人間知んぬ幾々。』
字解併せて分解。

蕩、うごかすこと。——鬣、魚のひげ又はひれのこと。——
鯨噴、鯨の如くに噴く。——雷震、雷の如くに震ふ。——
幾々、幾人とすべきを文字の都合上、幾々としたので別に深き
仔細はない。

提講。

一二の句で、三聖禪師は網を透り來つた魚の如く自由自在に
飛躍して聊かも水中に束縛されて居らぬことを謠うた。茲に雪
竇禪師、「我も亦然り。」と云ふ心なきにしもあらず。——圓悟

禪師曰く、「千聖も如何ともせず。」と。果して然るや。又曰く、
「活潑潑地。」と。或は然らん。敢へて三聖禪師のみに非ず。人々、喫
茶、喫飯底、そのまゝ、それが千聖も如何ともなし得ざる活潑潑地
でなければならぬ。』搖乾蕩坤云々の二句、是は三聖禪師が網を
透る金鱗、既に龍と化して居るから尋常の魚と同一視する勿れ。
看よ鬣を振ひ尾を擺いて天地を震動させるのみか本分の力を出
せば盡十方法界七花八裂にするぞ、と。——此の處へ圓悟禪師
は、「作家々々。」と云うて居らるゝかと思ふと、「未だ奇特の處に
あらず。」と云うて御座る。如何にも作家の處もあるが、不奇特の
處もある。所謂、鳥なき里の蝙蝠。——されど一千五百人の

善知識、話頭も也も不識と云ふ勢ひは、大鯨が潮を噴出して荒浪を起し人をして其の端倪を辨ぜざらしむる様子なきにあらず。

——圓悟禪師、一寸横槍を入れて曰く、「那邊に轉過し去るや。」

——網を透りし金鱗の三聖も那邊に轉過し去ると云ふ網にかゝつた。——雪峰禪師、三聖に對し、老僧住持事繁、と云は

れた。之是の一語、一聲雷震清颺起、で、夕立の雷聲一過すれば忽ち清風颺々と吹き來り、天地を一掃し乾坤を一洗し、其の快、其の清、蓋し言語文字の及ぶ處に非ず。然れども知人稀なり。

圓悟禪師曇華どんげに先んじて曰く、「有眼有耳、如聾如盲。」と。——

清颺起、是は雪竇禪師の常例。深く人に注意を促す方策。——

否、清颺そのまゝが雪竇禪師。——雪竇禪師そのまゝが清颺。

——清颺そのまゝが雪峰禪師、——果して然らば清颺は什

麼の處にある。天上人間知幾々、誰が家にか清風なからん。清

風は古往今來、十方法界、颺々として未だ曾て休止することなし。然るに知幾々と云はるゝ處を見れば、多くの人は近きにあ

る道を知らずして是を遠きに求む、それを慨嘆せられたのである。而して知幾々の一人は雪竇なりと云はぬばかりである。

——多少重複に亘るが、好學者の爲に天童禪師の頌を加へて置きます。

浪級初昇、雲雷相送、騰躍稜々看大用、燒尾分明度禹門、華

鱗未肯淹壑甕、老成人不驚衆、慣臨大敵初無恐、泛々端如五兩輕、堆々何啻千鈞重、高名四海復誰同、介立八風吹不動、浪級初昇、雲雷相送から壑甕まで、「三聖の勢ひ、其の鋭きを云ふ。——「老成人不驚衆、」是は雪峰の老熟にして平々凡々、されど大將軍であるから、慣臨大敵初無恐、で小敵を侮らず大敵を恐れざる處に老古錐の價值がある。——「泛々端如五兩輕、」是は譬へで、鳥の毛が風に随つて軽く舞ふ様子。老古錐の居動一切がそれと同一で聊かも私意我念を加へず、所謂赴感隨縁。』五兩は風を見る道具、風のまに／＼東西南北、泛々として自由自在に輕動する。——「堆々何啻千鈞重、」堆々は土の

堆きを云ふ。大丈夫の不動著、その様子、啻に千鈞の重きのみならず。不動にして且つ重し。搖が、さんとして、搖が、す能はず、除かんとして、除く能はず。所謂泰然不動、是は雪峰禪師を稱讚したのである。——「高名四海復誰同、」支那四百餘州、廣しと雖も雪峰禪師の如き、法に於て自由自在の働きをなし得る人は他にあるなし。故に其の名赫々たり、天下無比。——「介立八風吹不動、」人と云ふ人は、貴賤、貧富、老若男女を問はず、何れも利衰毀譽稱譏苦樂の八風に吹き倒されざるなし。然るに雪峰禪師は、安住不動、如須彌山。直立して外來の事物に對し毛髮だも動轉せず、と重ねて雪峰禪師を托上された。必ずしも

雪峰のことと思ふべからず。人々お互が斯くなければならぬ。
—— 以上は天童禪師の頌。試みに雪竇禪師の頌と兩々相對し、
以て其の意味、何れの邊にあるかを探尋すべし。徒に文字言句
の上に着目して、彼れ是れと妄想分別を弄し貴重の時間を費や
し、燈籠露柱の冷笑を招く勿れ。

(昭和十三年九月十七日講演)

第五十則

雲門塵々三昧

◎垂示

垂示云、度越階級、超絶方便、機々相應、句々相投、儻非
入大解脱門得大解脱用、何以權衡佛祖、龜鑑宗乘、且道、
當機直截、逆順縱橫、如何道得出身句、試舉看、

讀方

垂示に云く、階級を度越し、方便を超絶し、機々相應じ、句
々相投ず。儻し大解脱門に入つて、大解脱用を得るに非ざれ
ば、何を以てか佛祖に權衡し、宗乘に龜鑑たらん。且く道へ、

當機直截し、逆順縦横して、如何が出身の句を道ひ得ん。試みに擧す看よ。』

字解と分解。

階級、漸機の人の爲に佛は五十二位の階級を設けられた。其の五十二位は、曰く十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺。——分段生死、變易生死と云ふ階級もある。——方便、實際から云へば五十二位も方便、分段變易の二生死も亦方便。——三世諸佛の經文、總て是れ方便ならざるなし。——度越、超絶、是は右の方便を打破し、一超直入如來地、衆生本來成佛、と悟得し證入することを云ふ。——機々相應、機々

は動作、作行、如何なる場合に臨んでも其のものそれに對して臨機應變の活動をなすこと。例せば師弟の間、主客の間、菩提心そのものより慈悲そのものより、全機を以て互に相對し、全機を以て互に相應ず。故に自然に句々相投ず。——句々、言語、議論、又は喝と喝と相投じ、咄と咄と相投ず、それを禪家の慣例語で、水、水に投じ、空、空に入ると云ふ。——解脱の當體。——解脱用、是は悟りの活用、悟りの光輝。——以上の境界を手に入れざれば佛祖に權衡たることも宗乘に龜鑑たることも出來ぬ。——權衡は平均と云ふ意、佛祖と同一に

なると云ふこと。(佛祖を測量すると云ふことでなし。)宗乗は
 禪門と云ふ意に解すべし。—— 龜鑑は禪門屈指の人になると
 云ふこと。或人は、佛祖を權衡し、と讀む。其の時は、自己の
 力を以て佛祖を測ると云ふことになる。それには是非とも宗乗
 の龜鑑とならざるべからず。—— 當機直截、機々相應じ句々
 相投ず、と殆ど同意。—— 出身句、是は自己なき言動、所謂、
 物外に超出したる言語動作。—— 更に云ふ、眞理に到達して
 眞理と共になす働き。—— 本則の雲門禪師の如きがその好典
 型である。」
 提講。

何事にも次第もあれば階級もある。特に佛教は涅槃の妙覺に
 達するまでには、方便と云へば方便、手段と云へば手段、何れ
 にしても澤山の階級が設けてある。然るに禪門では、それら都
 ての階級を度越し、それら一切の方便を超絶し、虚空消損、鐵
 山碎くと云ふ百尺竿頭更に一步を進め、十方世界に全身を現す
 と云ふ本地の風光裡に坐在し、以て師弟と相對し、主客と相見し
 且つ一切の萬物と交渉するが故に、意を用ひず念を勞せずして
 自然に機々相應じ句々相投ずることが出来る。—— 之是の機
 々相應じ句々相投ずる底は國家興隆の本元にして、家庭圓滿の基
 礎、四海平和の良薬にして上下協力の子、重んずべし、輕んず

べからず。』されど恁麼の境界に到達するには尋常ならざる修行を要す。着目すべし注意すべし。——儻非入大解脫門得大解脫用、何以權衡佛祖龜鑑宗乘、と云ふ之是の垂示を我ものになさんと欲せば第一に自己の妄想袋を破壊せざるべからず。如何に妄想袋を破壊すべきや。曰く、殺せ殺せ、自己を殺せ、自己を殺せば一切の物も同時に殺し得る、殺して殺したそのもの、その痕跡もなき迄に殺し盡すべし。——徹底的殺し盡した其の時始めて大解脫門に入ると共に大解脫の用が我手に入る。此の處を古人は、此の關を透得すれば乾坤獨歩、——又は萬象之中獨露身、と云うてをらる。茲に到達すれば逆順縱橫、能

く佛祖と權衡し、——橫拈倒用、能く宗乘の龜鑑となること、が出来る。出身の句の如きは敢へて思慮を要せず。其の時、其の場、物に對し人に應じ、機々相應じ句々相投ず。それそのものを事實に確證なされし人は本則の雲門禪師その人である。參じて知るべし修して悟るべし。』

◎本則

舉、僧問雲門、如何是塵々三昧、門云、鉢裏飯、桶裏水、

讀方

舉す。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ塵々三昧。」門云く、「鉢裏には飯、桶裏には水。」

字解、分解。

塵々、華嚴經に、一微塵中入三昧、成就一切微塵定、とある。問僧は蓋し華嚴經の此の句を轉用して雲門禪師に問うたものならん。」井上君は此の塵々につき左の如く云うてをらる。」宇宙に存在して居る無限、無數、無量の分子とか原子とか云ふものは何れも絶對的眞理の露現であり神の默示であつて、その各分子、各原子の中に、佛も神も眞理もチャント活現して居る。」と。如何にも云ひ得て確實である。——三昧、一口に云へば坐禪のこと。譯して正心行處とも正受とも云ふ。其の意は物我不二、心境一如、になることである。」大内君は、尋常の人に解

し得る様に極めて平凡に、「正受は讀んで字の如く正しく受ける」と云ふ事、譬へば明かなる鏡は花が來れば花のまゝに、月が來れば月のまゝに、歷々分明、公明無私に受けるやうに、吾々の心鏡に一點の曇が無くなつて、宇宙萬象ありくゝと其の實相妙用を公明無私に顯すことの出来るやうになるのが三昧である。」と云うて居らる。」是亦語り得て惡しからず、採つて以て參考の一助となすべし。——鉢裏飯、桶裏水、改めて申す迄もなく是こそ讀んで字の通り、鉢(椀のこと)には飯、桶には水、是が塵々三昧とは、少々處ではない、大いに受取り兼ねます。然れども是が眞箇塵々三昧であります。

提講。

神も佛も眞理も大道も決して遠い處や高い處にあるものではない。極めて近き處、至つて低き處にあります。それを知らずして無理に神や佛や眞理大道を人間以外の遠い處に向つて強ひて探り尋ねるは愚の極である。』鉢の中には飯があり、桶の中には水がある。その飯、その水、其の鉢、其の桶、——鉢と飯と、三昧。——桶と水と三昧。——其の三昧のまゝ、それが雲門、禪師の華嚴經に於て、即塵々三昧である。塵を字の如く極めて細小なるものとしても其の細小の中に十方法界を優に包含して居る。古語に、微塵裏に大法輪を轉ず、——微塵を破りて

大經卷を出す、とある。』——されど十方法界、大法輪と云うても必ず大と確定したり、妄信してはならぬ。禪家で云ふ大小は大小を超越したる大小である。故に極大は極小に同じ、極小は極大に異ならず、と信心銘にある。——問僧は恁麼の道理を知つて問ふたか知らずに問ふたか。知つて問ふたとすれば雲門禪師を愚弄することになる。知らずして問ふたとあらば盲蛇。圓悟禪師の下語に、「沙を撒し土を撒して什麼をか作さん。」塵々三昧と云ふだけ佛法くさい、——悟りくさい。——名目を並べ立て、それが何になる。知らずや、眞箇の塵々三昧は滿口に霜を含む、だ。口で云はんとして決して言へるものでない。』

——されど雲門禪師は無口の口を開き無舌の舌を振うて、鉢裏の飯、桶裏の水、と塵々三昧そのまゝ問僧の面前に托出なされた。可謂、和盤托出夜明珠、と。——或人は雲門禪師を賞讃して、「百花叢裡を過ぎ、一葉、身を濕さず。」と。——圓悟禪師は、「錯を以て錯に就く、問僧も錯なれば答師も錯、錯、錯、何れも錯。」と云うて塵々三昧の當體を言外に響かして居る。』諸君、聞きましたか。聞いても聞かんでも、お互が平生塵々三昧底である。それを度外視して更に塵々三昧を彼れ是れと論談するは含元殿裡に居して長安を問ふに同じ。古今の色なき松に笑はるゝぞ。上下の節なき竹に唾せらるゝぞ。——(含元殿と

は唐の景宗皇帝が建てられた宮殿即ち天子の居處。長安は即ち其の含元殿のある處。含元殿の裡に居りながら長安は何れの處ぞと問ふ必要はない。)されど因地一聲下に塵々三昧底を證得せざれば、鉢裏飯、桶裏水、それ、それが胸につかへ咽に塞がつて塵々三昧の境に従容自適することが出来ぬ。——苟も禪家者流は此の塵々三昧を證得せざれば衣架飯囊、徒に信施の食を費やす。——未來は牛である。否、現に人面の牛である。——恐るべし愧づべし。——幸に一超直入、塵々三昧の境致に到達し來らば、一切の動作が即佛動佛作、祖動祖作である。——試みに人あり、來つて衲に、「如何が是れ塵々三昧。」と問

はば衲は、「下手な長談議、今日。は。是。まで。」と。

◎頌

鉢裏飯桶裏水、多口阿師難下嘴、北斗南星位不殊、白浪滔
天平地起、擬不擬、止不止、箇々無棍長者子、

讀方

鉢裏には飯、桶裏には水、多口の阿師も嘴を下し難し。北斗
南星位殊ならず、白浪滔天平地に起れり。擬不擬、止不止。
箇々無棍の長者子。』

字解、分解。

多口阿師、強ひて口を開き敢へて舌を弄する饒舌家のこと。

そこらにも、こゝらにも多口の阿師が澤山居る。——言葉多
きは品すくなし。天は無語、地も無語。然れども四時行はれ、萬
物なる。——衲も或意味に於て多口の阿師である。——下
嘴、これは容喙すること。俗に云ふ、口をだすこと。必ずしも無
口を賞讃する所以に非ず。論ずべきに當つて論じ、辯ずべきに
臨んで辯ずるは寧ろ當然。然るに黙すべき時、口を結ぶべき處
に於て嘴を下すは害あつて益なし。口は須く壁上に懸くべし。
——茲には難下嘴、とあるから、如何なる能辯家と雖も塵々
三昧の當體は云ひ得ず語る能はず、と云ふことである。——
位不殊、位置に優劣なしと共に高下の差別なし。是法平等、無

有高下、北斗南星のみに非ず、人生の總てがさうである。柳は、
 綠、花は紅、そのまゝ位不殊、——晝は明るく、夜は暗し、そ
 のまゝ位不殊。——餘は推して知るべし。——擬不擬、止
 不止、井上君は、「是は唐宋時代の俗語、サアドウシタモノカ、
 ヤツケヨウカ、ヤメヨウカ、と云ふ意である。」と。如何にも然
 らん。擬するが如くで擬するに非ず、止まるが如くで止まるに
 非ず。衲が如きも平素斯の如き場合が度々ある。』大内君は、「所
 謂君子は義に悟るで、彼の孔子が、道は須臾も離るべからず離
 るべきは道に非ず、と云うたやうなもので、離れたいと思つたか
 らとて離れられるものでない。然らば其の道とは如何なるもの

かと云へば、聲もなく臭もなく夫れ至れるかな、で。」と云うて居
 らるゝ。是又採つて以て考一考すべき資料であります。——
 無裊、裊は禪と同じ。男子なればフンドシ、女子なればユモジ、
 それのこと。無裊とあるは丸はだかの事。此の丸はだかが本來
 の面目。——寸絲掛けずと云ふが蓋しそれである。——長
 者子、是は維摩經にも法華經にも出て居ります。坐禪和讃に、
 「衆生本來佛なり。」とある其の本來佛なりが長者の子である。』
 廣義に云へば諸君は元より衲も其の他一切の總てが悉く長者子
 である。現今お互は長者の窮子である。——アーはづかしい。

提講。

塵々三昧の間に答へて雲門禪師は、鉢裏には飯、桶裏には水、と句々相投ぜられた。如何にも其の通り。塵々三昧の提唱は是で終結。』——此の鉢裏には飯、桶裏には水、と塵々三昧底を雲門禪師が面前露堂々に放出された、それに對しては、如何なる雄辯家も如何なる饒舌家も満口に霜を含む、で口アングリ何とも云へるものでない。若し云へるなら云うて見なさい。云へば云ふほど、語れば語るほど、塵々三昧でなくなる。——佛祖と雖も倒退三千する處だ。況んや其の他の人に於てをや。速退々々。』——北斗南星、飯と水とに引っかけて、一は南、一は北、一は飯、一は水。されど法は法位に住して世間相常住、

差別のまゝが即平等、平等のまゝが即差別。心佛及衆生是三無差別、其のもの、それ自身、そのまゝ、一々塵々三昧。——その三昧のまゝの立場から云へば、如何に千差あり萬別ありと雖も位不殊である。——白浪滔天平地起、此の句を秋野師は、「無差別の平穩無事なる處から差別界の大波瀾を起して活動せねばならぬ。其の白浪滔天の上に又白浪滔天の大奮發心を起さねばならぬ云々。」と云うて居らるゝ。學者を鞭撻するには無上の教訓であります。されど雪竇禪師の意は蓋し茲にあらず。雪竇禪師の意を忖度すれば、雲門禪師の答話そのものが白浪滔天平地に起つた様なものだ。鉢裏飯、桶裏水、と聞いて四海五湖の

人々が驚愕するのも無理はない。』されど塵々三昧に入らんと欲せば、擬不擬、止不止、は大なる禁物。秋野師の教訓に随ひ白浪滔天の上に又白浪滔天の奮發心を起こし邁往勇進せざるべからず。人々箇々長者子であるぞ。自ら甘んじて下劣の漢となる勿れ。八解六通心地印。——階級を度越し方便を超絶して如來地に到達すべし。摩尼珠は、如來藏裡に收得して居るぞ。自己の尊貴を忘却して空しく天下の放浪者となる勿れ。——斯く云はるゝは雪竇禪師の塵々三昧。——それを口傳して諸君の耳に達するは衲の塵々三昧。——それを聞いてをらるゝ、それは諸君の塵々三昧。——

(昭和十三年十月八日講演)

碧巖錄講演第一部(含第五十則迄)自其十九總目次

序	文	卷頭	頁數
碧巖錄講演の前提	(一)	一	一
同	(二)	一	三三
同	(三)	二	一
同	(四)	二	二七
碧巖錄提講		三	一
第一則 聖諦第一義		三	一六
第二則 趙州至道無難		三	四一
第三則 馬祖日面佛月面佛		三	六九
第四則 德山挾複子問答		四	一
第五則 雪峰粟粒		四	三三
第六則 雲門日夕好日		四	六七

第七則	慧超問佛	五	一
第八則	翠岩眉毛	五	三一
第九則	趙州四門	五	五七
第十則	睦州掠虛	六	一
第十一則	黃檗唾酒糟漢	六	二九
第十二則	洞山麻三斤	六	六四
第十三則	巴陵銀碗裏雪	七	一
第十四則	雲門一代時教	七	三六
第十五則	雪門倒一說	七	六九
第十六則	鏡清啐啄機	八	一
第十七則	香林坐久成勞	八	四四
第十八則	忠國師無縫塔	九	一
第十九則	俱胝只豎一指	九	四四
第二十則	翠微禪板	十	一
第二十一則	智門蓮華荷葉	十	四三

第二十二則	雪峰煞鼻蛇	十一	一
第二十三則	保福長慶遊山次	十一	四二
第二十四則	鐵磨老特牛	十二	一
第二十五則	蓮華拈拄杖	十二	四三
第二十六則	百丈獨坐大雄峰	十二	七八
第二十七則	雲門體露金風	十三	一
第二十八則	南泉不說底法	十三	三一
第二十九則	大隋隨他去也	十三	六九
第三十則	趙州大羅蔔頭	十四	一
第三十一則	麻谷持錫遶床	十四	二九
第三十二則	定上座佇立	十四	六四
第三十三則	陳操具隻眼	十五	一
第三十四則	仰山不曾遊山	十五	四〇
第三十五則	文殊前後三三	十五	六九
第三十六則	長沙芳草落花	十六	四

39°
B

第三十七則	盤山三界無法	十六	二四
第三十八則	風穴祖師心印	十六	四四
第三十九則	雲門花藥欄	十七	一
第四十則	陸亘天地同根	十七	二一
第四十一則	趙州大死底	十七	四二
第四十二則	龐居士好雪片々	十七	六三
第四十三則	洞山無寒暑	十八	一
第四十四則	禾山解打鼓	十八	一七
第四十五則	趙州七斤布衫	十八	三三
第四十六則	鏡清雨滴聲	十八	五二
第四十七則	雲門六不收	十九	一
第四十八則	王太傅煎茶	十九	二三
第四十九則	三聖透網金鱗	十九	四五
第五十則	雲門塵々三昧	十九	六五

八八

以上

昭和十四年六月十三日印刷
昭和十四年六月十九日發行

發行兼 印刷者 佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井會社發行

發行所 東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井會社考査課

終